

「教育の心理學」に関する研究と二つの世界大戦(Ⅲ)

—戦時における臺灣・中國・フランスと日本の関わりを例に—

坂西友秀 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

キーワード：教育の心理學、世界大戦、植民地教育、ホロコースト、抗日運動

全体的考察

臺灣と中国東北部延辺朝鮮族自治州延吉市の戦跡を訪問し、展示資料と現地関係者からの聞き取りを行った。「教育の心理學」が研究領域・分野として定着する時代的背景を明らかにするために、1880年代後半から1900年代中頃までの日本とアジア諸国の関係を探った。「大東亜共栄圏」の建設の大義名分の下、日本が東アジアの植民地支配を拡大させる中で、日本式の学校の設置と教育の普及・浸透、日本語使用の強制を通じた現地教育の支配、これらは皇国民への教化策として最重要課題であった。本研究の分析から本小論で提起する鍵概念は、「戦争の残虐性」、「植民地教化教育」、「レジスタンス」の3つである。

「戦争の残虐性」は、戦争は人々を救う行為ではなく、殺戮・殺傷することに本質があるという意味だ。「植民地教化教育」は、支配勢力・占領国は、自らに利する社会体制を構築するために、教育・教化を通じて精神的支配を徹底するという意味である。「解放運動・レジスタンス」は、支配国・統治国の植民地施策、弾圧、慰撫策等に対して、住民・民衆は屈することなく激しく対抗・抵抗・闘争してきたことを意味する。

これらの歴史的事実は、決して過去の出来事ではなく、今私たちが住む社会・生活と密接に結びつき、土台と背景を成している。一例を挙げよう。延吉市にある「革命烈士陵園」は、中国の

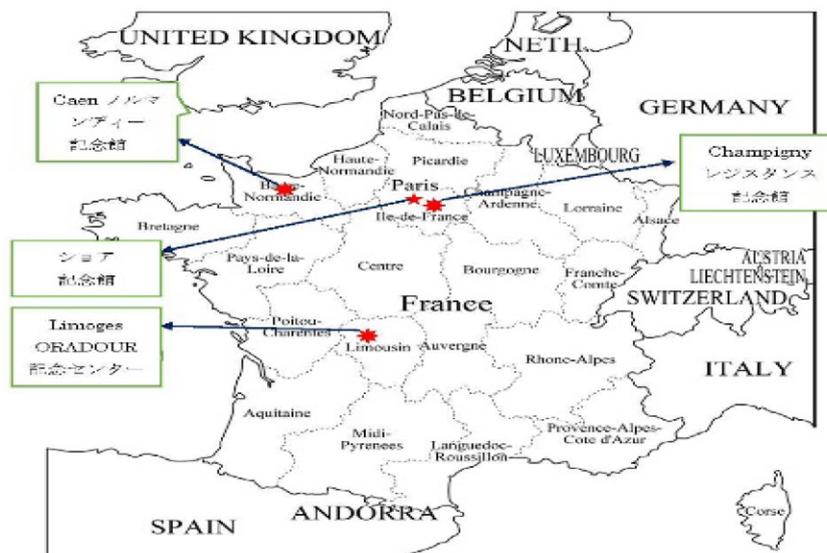


図39 フランス全図と主な訪問地

歴史教育施設の一つだ。「『反戦烈士 愛国主義教育模範基地』の第1次指定100か所のリストは、…1996年6月11日に公示された。共産党中央宣伝部は、…近代の帝国主義侵略の受難と中国人民の抵抗を示すもの9か所、…としている。…『近代の帝国主義侵略の受難と中国人民の抵抗』には日本に対する抵抗も当然含まれているが、『抗日』には特に言及していない。このことから、『愛国主義教育模範基地』が特に日本に照準を合わせることを意図したものではないことがわかる」（岡村，2004）。一次リストには陵園はないが（当時墓地公園は未完成か）、二次のリストでは、延吉市の「四平戦役記念館及び四平烈士墓地公園」「延辺革命烈士墓地公園」「『四保臨江』烈士墓地公園」が指定されている。第2次指定の模範基地は、中国共産党の歴史を内容とするものに特に重点が置かれ、「抗日戦争期の重要戦役に関するもの」が内容分類に含まれている（岡村，2004）。

日中の関係は2012年、日本政府の尖閣諸島の国有化をきっかけに悪化した。「中国のメディアが日本の歴史問題に対する批判を強めている。同国の文献保管機関は、第2次世界大戦後に中国で軍事裁判を受けた旧日本軍人の供述書を公開した。戦犯と認定された日本人45人の供述内容を公開するため、インターネットに専用サイトが設けられた。文書には手書きで、多数の女性を強姦したことや、中国人を生きたまま埋めたり解剖したりしたことを認める供述が記されている」。CNN（2014）のこの報道は、歴史が過去のものではないことを如実に示す。陵園が現在の重要な歴史学習の場であることが容易に理解できる。

日中戦争は、世界を巻き込んだ戦いであり、連合国（主に米、仏、英）と日本、ドイツ、イタリアの間の戦争であった。前掲の三点「戦争の残虐性」、「植民地教化教育」、「解放運動・レジスタンス」は、アジアだけの問題ではなかった。ここでは、連合国の一員であったフランス（図39）から見た日本を概観し、さらに戦跡や記念館の展示資料及び聞き取り調査を通して、戦争が洋の東西を越えて持つ共通した問題・性質を考察する。

戦争の残虐性-ショア記念館 2014年9月25日、ガリマールのショア（ホロコースト）記念館 Gallimard Mémorial De la Shoah）を見学した。2005年1月25日開館、27日（アウシュビッツ収容所解放記念日）に一般公開が始まった。挨拶でシラク大統領は、戦争犯罪を断罪し、ユダヤ人迫害にフランス（Vichy政権，1940-1944）が加担したことにも言及し謝罪している（日本共産党，2005，松岡，2013）。中庭には、フランス国内の収容所（キャンプ）の名が刻まれた青銅の大きな円形記念碑が建つ（図40）。ユダヤ人虐殺の歴史に関する文献・記録、写真等3,000万の資料を集めた欧州最大規模の展示資料館だ。高さ5mもある巨大な石版に挟まれた通路を進んで館に入る（図41）。壁面（Wall of Name）には小さな文字で犠牲になったユダヤ人の名前（1942年～1945年にフランスから国外に強制移送された76,000人）が隙間なくびっしり刻み込まれている（Fredj, 2011）。

内部は撮影禁止。展示室への階段を降りると、1994年のルワンダ虐殺の惨状を展示していた（Rwanda Expositions, 1994・4・11～10・5）。フランス国内のユダヤ人迫害から解放に至るまでの歴史的経過を、Vichy政権のナチへの加担を通して時系列で展示し、解説している（表5）。Vichy政権下でフランス警察は、ユダヤ人住民の個別の情報を収集し、一人一人カードに記載し登録した。薄黒く変色した夥しい数の個人識別情報カードが、照明を落とした薄暗い小部屋に陳列されていた。子どもや女性、家族、親族、学友の写真、家族や友人に宛てた肉筆の手紙や私信、無造作に放り出され野晒しにされた衣服や靴や帽の記録映像、「ショア」が目の前で繰り広げられ、恐怖に襲われた。ショア記念館の常設展示と収集品を豊富な写真資料として掲載し、詳細に説明・解説した案内書籍「The Jew of France during the holocaust」（Fredj, 2011）が、記念

表5 フランス・ガリマール・ショア記念館・展示内容

展示順	展示テーマ	展示内容
展示1	歴史	フランスにおけるユダヤ人の歴史、ヨーロッパにおけるユダヤ人憎悪の歴史
展示2	人種主義者の台頭と反ユダヤ思想 (1933-1939)	ナチズムの台頭・戦争前夜のフランスにおけるユダヤ人
展示3	排除と投獄 (1939-1941)	最初のゲットー・フランス：Vichy (ヴィシー) 政権の台頭
展示4	ユダヤ人大量殺戮の第一段階	ヨーロッパにおけるユダヤ人の根絶・ユダヤ人のフランス国外移送にたVichy政権が果たした役割
展示5	アウシュヴィッツ-ビルケナウ (Auschwitz-Birkenau)、集中と死の収容所	アウシュヴィッツ-ビルケナウ
展示6	アーリア化 (Aryanization) と略奪 (Looting)	ユダヤ人からの略奪：政治的経済的な利害関係・フランスでのユダヤ人所有物の略奪
展示7	ナチの犯罪に直面した社会	無関心からナチズム支援へ・ドイツ、厳しい統制下の社会・フランス：受身から憤りへ
展示8	抵抗運動 (レジスタンス・resistance)	市民抵抗運動と武装抵抗運動・フランスにおける迫害を乗り越える・余儀なくされた地下活動・抵抗運動におけるユダヤ人・北アフリカのユダヤ人の運命
展示9	戦争集結の瞬間まで続く迫害	ヨーロッパの最後の迫害・フランス：反ユダヤ感情の高揚
展示10	解放	扇動の集結・フランス、解放から戦後期へ
展示11	ホロコースト (大量殺戮) の記憶の構築	ニュルンベルク：国際的正義が最初の一步を踏み出した・記憶から歴史へ
展示12	それぞれの人々の命運	Walter karliner, Hélène Berr, Pieer Kauffmann, Arno Klarsfeld, Raymond-Raoul Lambert

(Fredj, 2011より)

館から発行されている。戦争がことばでは表現できない、如何にむごいものであるかを伝えている。まえがきで次のように述べている (Simone veil, 2011)。「アウシュヴィッツ-ビルケナウを今日まで生き残ったごくわずかな人々がいる。その数は300人に過ぎない。私たちが、表に出していない証拠は、ほどなく大量殺戮のかすかな形跡にしかならなくなってしまいます。それ故、歴史のこの章が私たちと共に消滅しないよう、パリの“ショア記念館”のような施設が、この証拠資料を確実に永続させなければならないのです。…迫害された人々の証言は、私たちがいなくなっても伝えられ続けなければならないのです。これが、私たちが皆さんに託する記憶であり、歴史というも



図40 ショア記念館-フランス内全強制収容所名

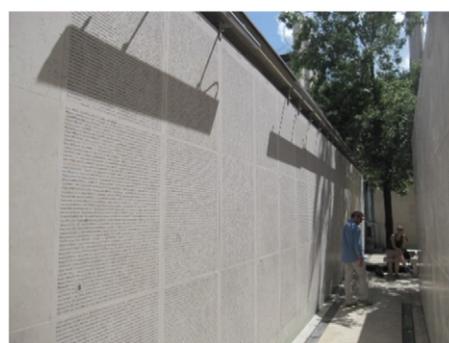


図41 フランス国内のユダヤ人犠牲者名碑

のなのです」(Fredj, 2011)。館(図40・図41)を訪れる人たちが、「ショア」を学び、感じ、決して忘れないことを願っている。その通りだと思う。

戦争の残虐性-オラドゥール村 2014年9月26日、世界大戦終結直前、ナチスSSが、住民を皆殺しにし、焼き払った村ORADOUR(オラドゥール村)を訪れた。チェコのリディツエ村が、ナチス軍によって破壊し尽くされたように(Památník Lidice, 2014)、オラドゥールの人々は虐殺され燃やされ、村は廃墟になった。パリからは遠く、最寄りの駅Limoges(リモージュ)まで特急で3時間ほどかかる。そこからさらにバスで約30分の静かな農村地域である。パリ東駅で地下鉄に乗りAustritz駅で下車し、Limoges行きの長距離列車に乗りかえる。改札口がなく、乗車券をホームに設置された日付プリンターに通して印字してから乗車する。車窓には、農地が広がり、牧場が多い。EU最大の農業国を印象づける景色だ。ところどころ畑の中に風力発電の風車が立ち並んでいた。

リモージュ駅は大きい、人口が少ないからか人影は疎らだ。駅舎には大きな時計台があり、駅前には公園がきれいに整備されていた。バスの本数が少ない、行き先が多様、バス停がわかりにくいなど、目的のバスに乗るのに苦労した。女性運転手が多く、そのバスも同様だった。彼女には英語が、私たちには仏語が通じず、彼女の説明の苦労が大きかった。身振り手振り目の動き、さらにことばの抑揚で彼女の言わんとすることを推測した。どうやら「リモージュ駅-オラドゥール間を往復するこのバスの最終便で今日中に帰りなさい」、ということのようだった。現地で一泊するので無理な話だった。「日帰り」を彼女がしきりに勧めた理由は、現地の案内所に行って初めてわかった。日曜日にはバスは運行しないからだった。オラドゥールには、2階建てのホテルが一軒あるだけ、他は小さな民宿しかない。都市近郊の自然豊かな高級別荘地であろうか。アジア、アフリカ人はほとんど見かけなかった。

ナチのホロコーストは、こんな辺鄙な農村で起きたのだ。それほどまでにナチス・ドイツのフランス侵略は、広く深く進められた。山村とはいえ、当時オラドゥールには、電信電話局があり、目抜き通りには路面電車が走っていた。小さいながら活気のある共同体だった。オラドゥール・シュル・グラヌ(Oradour-sur-Glane)、ナチス・ドイツ軍が、突然子どもも大人も、男も女も皆殺しにし、すべてを焼失させた村だ。1944年6月10日、午後だった。男性は納屋に監禁し、一人一人銃撃・射殺し、木片やわらを積み足下から火をつけて燃やした。生きながらに焼かれた人もいた。女性と子どもは教会に閉じ込め、爆発と放火で焼き殺した。逃げ惑う女子どもを協会の外から撃ち殺した(図42・図43)。LimogesからOradourに向かう列車は途中で止められ、何も知らずに



図42 廃墟のオラドゥール村



図43 燃やされ溶け錆びた車? 農機具?

乗客は下ろされ、村民だけ選別されて銃口を前に死を待った。奇跡的に解放されたが、入村は禁じられた (Edition de l'Association des Familles des Martyrs d'Oradour-sur-Glane, 1944)。

642人の住民 (7人のユダヤ人の難民を含む) が虐殺された。全員がひどい負傷をしたが、6人の男性と1人の女性だけは生き残った。他の約15人の村民は、大虐殺が始まる前にドイツ兵から逃れるか、隠れて奇跡的に強制招集を避けることができた。裁判で提示された証拠、そして、帝国将校に関する西ドイツの研究は、なぜSSはOradour-sur-Glaneを標的にしたのかについていくつかの説を生み出した。最も一般的な説明は、村民がレジスタンスを支援しているとの情報をナチス軍が得ていたというものである。そして、反政府勢力は、Karl Gerlach少佐を誘拐したが、彼は逃れたというものだ (United States Holocaust Memorial Museum, 2014)。真相は未だに不明だ。戦争は無辜の市民を死傷させ、究極の窮地に追いやる。臺灣、旧満洲、フランスのどの戦争にも共通することだ。

戦争の残虐性-ノルマンディー 1939年9月1日、ナチス・ドイツがポーランドに侵攻した。1941年12月6日、日本軍はハワイの真珠湾を奇襲攻撃した。アメリカが参戦し第二次世界戦争が始まった。日本のハワイ真珠湾の攻撃はフランスで大きく報じられた。フランス自体も、1940年6月16日、当時の枢軸国の一つナチス・ドイツにパリが占拠された。

フランスはヨーロッパ連合 (EU) では国土が最も広い (在日フランス大使館, 2014)。海外領土が多いこともフランスの歴史を物語る。北アメリカ沖、太平洋、インド洋にフランス領の島々があり、南アメリカのギアナも領土である。度重なる戦争とその「戦果」を示すものである。戦争の歴史は、フランス在住の外国人・移民の人口に反映している。2008年現在、フランスに居住する人口の8.4%が移民である。移民の2割は40年以上フランスに住み、3割はフランスに来て10年未満である。移民の43%はアフリカかマグレブ諸国、または旧フランス植民地の国の出身である (在日フランス大使館, 2012)。2005年の資料も類似の傾向を示す。「フランス本土の移民の42%以上 (210万人以上) がアフリカ生まれで、そのうち4分の3はマグレブ諸国、15%は旧植民地のセネガル、マリ、コートジボワール、カメルーン、コンゴの出身である」 (在日フランス大使館, 2009)。

労働事情にも歴史の反映を見て取ることができる。「外国人労働者の大半が賃金労働者である。国籍別に見ると、ポルトガル人は、1990年に比べると減っているが(-12%)、今日でも最も多く、外国人労働力人口の23.2%を占めている。また、マグレブ諸国の出身者を合計すると外国人労働者の3割を占める。ブラック・アフリカ諸国出身者の割合は、引き続き増加している (1985年3%、2002年は11.5%)。…EU以外の出身の外国人労働者では、…マグレブ諸国出身の女性は失業率が最も高い」 (在日フランス大使館, 2004)。マグレブ (Maghreb) 諸国とは、北西アフリカのリビア、チュニジア、アルジェリア、モロッコなどの諸国の総称である。フランスのかつての海外進出、植民地政策の歴史が現代に反映されていることがわかる。

2014年7月29日、連合軍が上陸し、ナチス・ドイツに支配されたフランスを解放に導く突破口になったノーマンジーを訪ねた。東駅 (Gare de l'Est) - オペラ駅 (Opéra・乗り換え) - セント・ラザレ駅 (Gare St-Lazare・長距離列車乗り換え) - カーン駅 (Caen) 下車、これがパリからの経路だ。カーン駅までは特急で2時間程度かかる。資料収集を兼ねて「歴史と平和のためのセンター、カーン-ノルマンジー記念館 (CAEN-NORMANDY MEMORIAL) を見学した。カーン駅から予定したトラムは運行休止中で、代替バスを利用した。館周辺は、最近開発された新しい街との印象が強い。子どもから年配者まで来館者の年齢幅は大きい。フランス以外のEUからの観光客も多

かった。東洋系、アフリカン系の来訪者はほとんど見かけなかった。

“All war is civil war,
for it is always man against man,
spilling his own blood,
tearing out his own trail.”

Fénelon, Dialogues of the Dead, 1712

「戦争はすべて市民の戦争だ、いつだって人と人の戦いだから、自らの血を流しながら、自らの歩んだ道を破壊しながら」。フェヌロンのことばが来館者を迎える。「戦争は人を救わず、人を殺戮する」。戦争の「むごさ」をここでも館が訴えかける。

展示を見て感じることは、資料が豊富であることだ。それと共に、館の構造も橋を配置したり、螺旋状に緩いスロープを下りながら展示品・写真を見たり、展示場の随所に戦時の民衆の生活や軍の行動、戦闘のビデオ映像が小型モニタで流れていたり、大画面・大音響で戦いの記録映画が上映されていたり、大人も子どもも、男性も女性も思わず足を止めて見入る工夫がよくなされていた。

記念館発行の展示案内書籍（*Mémorial de Caen, 2010*）が、館設置の趣旨を表している。「『世界戦争-全体戦争』の部では、各々の簡潔な章は、読者に戦争の具体的な面、例えばソ連へのナチ侵攻、ホロコースト、そして南京に対する日本の攻撃を、「『タイムライン（筆者注：時間線＝歴史的な事件を時間を追って線上に表現する）』、短いイメージ・キャプション、説明的なサイドバー、注釈付きの地図、慎重に集められ選択されたアーカイブ・グラフィックス、これらを通して案内します。この小さい物語は、ナチズムの高揚、フランスへの侵攻、英国の戦争、そして日本の真珠湾への攻撃からノルマンディー上陸（図44・図45）と、連合国がドイツと日本を打ち砕くまでを通覧して、戦時経験の全範囲を提示します。世界全体の真の歴史、占領下の生活、空爆兵器、核兵器、戦争犯罪と戦後の裁判、そしてアフリカやアジアにおける反植民地運動における戦争の役割を含め、本著はより広いテーマと経験を扱います」。館の展示では、日本の軍国主義、アジア諸国の植民地支配と残虐行為、大量殺戮が大きく取り上げられている。

館内にはいくつかのビデオ視聴コーナーがある。日本軍の中国での虐殺・レイプが証言映像と



図44 ノルマンディーに残るドイツ軍大砲



図45 ノルマンディー戦死者墓地（米）

して流れ、女性や子どもも見入っていた。日本の子ども・学生・大人は、こうした歴史をどれだけの人が知っているのだろうか。日本軍の大虐殺を説明した一部（英語原文）と館内の展示内容の概要を表6に示しておこう。「英語原文：On December 13, 1937, five months after the beginning of the invasion of China, Japanese Army entered the city of Nanjing. The aftermath of the city fall saw appalling carnage: execution by shooting, decapitation, drowning, stabbing, and burning alive, and an estimated 20,000 to 80,000 rapes. The hundreds of thousands of deaths during the Rape of Nanjing foreshadow the mass murder of World War II .」(Gullimar/Le Mémorial de Caen 2010, p.60).

表6 カーン・ノルマンジー記念館展示概要

展示順	展示テーマ・展示内容
展示 1	あいさつ：21世紀は10歳になった
展示 2	はじめに：歴史の対象としての記憶
展示 3	平和の崩壊：1918年11月－1939年8月
展示 4	暗黒の時代：ナチ占領下のフランス
世界戦争－全体の戦争	
展示 5	ヨーロッパの戦争から世界戦争へ
展示 6	大虐殺と集団暴力
展示 7	世界全体の戦争
展示 8	戦時下の生活
展示 9	連合国の再征服と解放
展示 10	犠牲と結果：戦時から起きていたこと
展示 11	記憶と歴史
展示 12	D-DAY（上陸の日）とノルマンディの戦い

Gullimar/Le Mémorial de Caen (2010) より

ノルマンディは、カーン（Caen）市の海岸線一帯を指し、東西約80kmある（AROMANCHES D-DAY MUSEUM, 2014）。1944年6月6日（D-DAY）、英、米、カナダを中心とした連合軍がノルマンディに上陸した。奇襲攻撃には、物資と兵力を輸送する軍港が必要だ。防波堤や棧橋など港湾建設に必要な部品は英国から極秘に運び、5月7日着工・突貫工事で上陸に間に合わせた。連合軍の最大の勝因として、記念館ではこの港湾建設の経過を特別上映している。

Caen周辺には18の共同墓地があり、上陸作戦で犠牲になった兵士が多いことを物語る(CWGC, 2014)。戦場になった海岸は、今は草原が広がる。ドイツ軍のコンクリート製の砲台があちらこちらに残り、壊れて赤茶けた大砲が砲身を海に向けている。この地を見学する日本人はいなく、案内の男性は私たちが初めての経験だといっていた。しかし、日本の真珠湾攻撃と米国の参戦、世界戦争という展開は、フランスでは衝撃の大きい重要事件だった。世界戦争で全犠牲者数（カッコ左数値全犠牲者数・右市民犠牲者数・単位万）が多かった国は、アジア・中国（2,500, 1,880）、旧ソ連（2,100, 750）、ドイツ（700, 300）、ポーランド（558, 530）、日本（300, 30）、ユーゴスラビア（187, 140）、フランス（50, 30）となっている。何れも軍関係者を市民の死者数が上回る。特に、アジア・中国、旧ソ連、ポーランド、ドイツ、ユーゴスラビアでは市民の犠牲者が多い。戦争は、市井の人々を救ってはいないのである。

宿泊はCaenから電車で20分ほどの所にあるバイユー駅（Bayeux）、駅前ホテル（民宿）である。

静かな小さな駅舎があり、乗降客は一日を通じて少ない。駅からは、バイユー・ノートルダム大聖堂の天に聳える尖塔がよく見える。宿の主人が、「あなたたちは、幸運ですよ。カーンの街は戦争で壊されましたが、この町はいくらも離れていないのに爆撃されず残っているのですから」。教会は、ノートルダム寺院に次ぐ大きさだという。12世紀にイングランドの王にバイユーが攻撃されたときと市民戦争後の2回、教会は火災に遭った。風光明媚、静かな街で戦争が繰り返され、その都度大きな被害を蒙った (Neveux & Ruelle, 2007)。戦争が庶民に何も利益をもたらさないことは古今東西変わらない。

レジスタンス 2004年7月31日、「国民抵抗の博物館」を訪問した。パリ北駅 (Nord) からシャトレアール駅 (Chatlet les Halles) へ、乗り換えてシャンピニ (Champigny) 駅へ行く。バスに乗り換え約15分、少し高台にある博物館に向かった。館は、住宅地にひっそり建っている。この地域がかつて反戦争、反ナチ運動の盛んな所、パルチザンの集まった地域だったという話しに通じるものかもしれない。表7は、館の展示の概要だ (MRN, 2014)。

臺灣、「満洲」で抗日運動が広がったように、ドイツ占領下のフランスでも抵抗運動は各地で起こり、仕事のサボタージュ、味方への情報伝達、対抗勢力の力の結集など、フランスの解放に大

表7 シャンピニー・シュル・マルヌ国立レジスタンス博物館

展示室	展示の時期区分・展示内容
展示室 1	<p>レジスタンスの始まり 1930-1940</p> <p>最初の展示室は、何がレジスタンスに至らせたか、そのルーツを明らかにすることを目的にしている。まず初めに、簡単にファシズムの台頭について述べる。それは初めナチス・ドイツで起こった。人間を侮蔑し、すべての自由を押さえ込む体制だった。ナチス・ドイツの究極の目的は、人々を、そして世界の国々を征服し支配することであった。この時期、誰もが諦めたわけではなかった。国家的な崩壊の危機を受け入れなかった人々がいた。各地に散らばり、水面下で活動した人々は多く、レジスタンスの力を示すこととなった。</p>
展示室 2	<p>レジスタンスの始まりと高揚 1940-1942</p> <p>1940年7月から、フランスの人々は別の世界を発見した。占領とヴィシー政権という二重の支配は、極限まで国民を崩壊させ、萎縮させ、心的外傷を負わせ、狼狽させた。占領軍は、表面的笑顔の欺瞞はすぐに消え、略奪と抑圧がまもなく始まった。《フランスの救世主》ペタン (Pétain) の神話がある《フランス国家》は、一方では国民にあきらめを説きながら、あらゆる領域における積極的な保守的政策の展開と《共同》の確立を可能にした。この時期、恐ろしい状況あったが、レジスタンスは、力強さを示していた。ゲリラ戦が形を取り始め、秘密の会合を持ち活動を展開した。</p>
展示室 3	<p>レジスタンス運動が攻勢に—1942年11月11日—1944年6月</p> <p>1942-1943年はレジスタンス運動の転換期であり、戦争の転換点でもあった。北アフリカへの連合軍の上陸とスターリングラードでのソ連の大勝利である。軍の勢力関係は逆転した。勝利を確信して、占領されている地域全体でレジスタンス勢力は攻勢をかけていた。この時期は、ますます広範囲な厳しい交戦が展開され、人々を流動化させていく時期である。</p>
展示室 4	<p>解放</p> <p>1944年6月6日、第二線戦線 (ノルマンディ上陸) が開始され、反撃が始まった。大きな調整組織の指示下、レジスタンス勢力は、あらゆるところで攻撃に着いた。人々はどんどん活動に参加し、フランス国内軍 (FFI) はさらに高レベルの戦闘を行った。こうした力を削ぐために、敵は勝手放題にした。残虐行為を加速させ (Oradour)、ゲリラの殲滅を狙った。ゲリラの戦闘と闘争は、かえって勢いを増した。フランスは、ドイツを撃破し、まだ牢獄や収容所で苦しめられている人々を解放する最終戦に入った時期だ。</p>

MRN (2014) より

きな貢献をした。中でも南東フランスの高原地帯を拠点に活動した民間組織マキ（Maquis）のレジスタンス運動はよく知られている。解放直前の1944年6月末、ドイツ軍との激しい戦闘で、456人の犠牲者がでた。1944年8月16日にはパリ近郊のブローニュの森で35人の若者が殺された。どこを見ても庶民の犠牲なしに終結する戦争はない。

愛国青年連合軍（Forces unies de la jeunesse patriotique）、フランス国内兵（Forces françaises de l'intérieur）、若い共産主義者（Jeunesses communistes）、青年学生キリスト教者（Jeunesse étudiante chrétienne）など、多くの抵抗運動のグループがあった（Krivopisco & Porin, 2000）。

記念館は、1985年以降、フランスのレジスタンスの歴史を、その起源から解放に至るまで展示してきた。第二次世界大戦中の、フランスの抵抗に関して最も重要なコレクションを見ることができる。1960年代には設立が構想されたが、終戦後間もないこともあり、まず資料を収集するなどの準備を進めたという。各地の支援者、レジスタンスで戦った人々、集中キャンプ（収容所）に入れられた人、市民など多くの人々の協力の賜だと記されている。1965年以来2,000以上の寄付が寄せられた。



図46 日本の真珠湾攻撃を報じる仏紙



図47 レジスタンスで使われた銃器

手作りのチラシと謄写版（鉄筆とガリ版）、ビラ、新聞、写真、書籍、生活用品、絵画、自転車、通信機、印刷機、等々よく収集し保存されている。階を下って地下に入ると、銃など武器も展示されている（図46・図47）。館の案内によれば、常設展示は、フランスのレジスタンス運動の始まり（1930年代）から解放までの歴史を明らかにしている。新たに発見される資料や異なる視点からのレジスタンスの解明を取り入れ、一層の充実を図ってきている。館は、主に4つの部分に分かれていて、概要は前掲表7の通りだ（MRN, 2014）。臺灣、中国、フランスには、「レジスタンス」記念館があり、戦争を振り返り、平和を考える重要な機会を提供する場になっている。植民地支配の「枢軸国」であった日本における「レジスタンス」を考えることは重要な課題である。日本には公立の「レジスタンス」記念館はあるのだろうか。日本の「レジスタンス」を個人的・集団的観点から総合的に捉える資料館、記念館の開設が望まれる。「レジスタンス」記念館ではないが、ショア記念館は、日本人杉原千畝を「東洋のシンドラー」として紹介している。彼は、次のように説明されている。

「The Japanese consul in Lithuania, Chiune Sempo Sugihara, with his wife in his office in Kovno (Lithuania) 1940. On his own initiative, he issued thousands of visa in August 1940/ This led to his being relieved of his duties in 1945.」（Fredj, 2011, p.132）。

杉原千畝（リトアニア日本領事館領事代理1939）の本国とのやりとりと救出行為は（アジア歴史資料館, 2014）、「消される命」を救う究極のレジスタンスであったといえよう。

植民地教化教育 日本の植民地、臺灣や旧満洲国では、日本語の使用が強制され、日本の学校教育が実施された。国内でも教育は統制され、天皇の威光を力説し、国民を戦争協力へと駆り立てていった。「天皇という存在は尊いものであり、現人神（あらひとがみ）であると、為政者は国民を教化しました」（加藤, 2011, p.42）。放送史研究家の竹山昭子は、「教化」と表現している。教化とは「国民道徳を基調とする大衆の思想善導または社会の改善の意味に用いられる（ブリタニカ大百科事典）。善導とはいえ、国策に都合のよい内容を教え、導く意味である。表8は、キー・シンボルの分析という方法で、政治家や軍人のトップにあった人たちが『ラジオ講演』・演説の中でどうしたことばを何回使ったかをカウントした結果だ（日中戦争が始まった1937年から太平洋戦争の終わり頃の1944年までの期間）。上位13種中、5つまで「天皇キー・シンボル」が占めている。使用頻度で見ても、上位13種の使用頻度合計は338、そのうち天皇関連は161と約半数を占めている。ラジオ講演・演説では、「聖戦」を説き、教化することが中心だったことを示している。

「軍人や校長先生が訓話をするとき、話している途中で、『本日はかしこくも』と言うと、聞き手は休めの姿勢をしてもパッと『気をつけ』の姿勢をします。『天皇』という言葉が出てくる前に、もう直立不動をしなければいけない。…「気をつけ」をするのは、公会堂や学校の校庭など公の場所だけです。そうしたときは、演説の場合でも、そこで話を止めるのです。それでみんながパッと直立不動の状態になった段階で「天皇陛下は…」となるのです」（加藤, 2011）。竹山のこの述懐は、学校が教化教育の場であり、考えさせない軍隊式の「上意下達」の条件づけが行われていたことを示唆している。

植民地支配した臺灣や旧満洲国では、いち早く日本の教育を実施している。臺灣總督府の學務部は、1895年6月17日には大稻埕庁舎を設け事務を開始し、「第一に緊要たる國語伝習所に着手」

表8 「キー・シンボル」上位13種（昭和12～19年）

順位	キー・シンボル	使用頻度
1	聖旨, 大詔, 勅語	74
2	一億一心, 億兆一心, 一致協力, 官民一体	49
3	東亜新秩序, 東亜建設	46
4	御稜威 (みいつ)	31
5	国体	23
6	大御心 (おおみこころ)	20
7	動員	18
8	共存共栄	15
8	尽忠報国	15
9	皇恩, 君恩, 聖恩	13
10	臣道	12
11	世界新秩序	11
11	大和魂	11

注) 特定個人が多用した「愛国」「経済ブロック」「隣組」は除外

※竹山昭子「戦時下のラジオ講演」『年報近代日本研究12 近代日本と情報』から、一部修正の上転載。

加藤 (2011) より

しようとしたが、臺北は治安が悪く、中流以上の人々は地方に避難し、「教育」を受ける対象者がいなかった。士林北方に庁舎を7月12日に移し、26日「子弟」10名程度を集め國語傳習所を始めた。しかし、翌年1月1日に6名の學務部員が「土匪」に殺され、國語傳習所の教育計画は頓挫した。日本の統治への住民の憎悪・反発が現れている。革命烈士の抗日闘争やフランスのレジスタンスが示すように、文化やことば・教育を統制しても人々の心と精神を支配しきることはできないことを示している。

1896年3月31日勅令で臺灣總督府直轄諸学校官制が制定され、國語學校及國語傳習所が設置された。同日臺灣總督府条例が制定され、現地教育が具体的に規定された。即座に実施すべき緊急事業としてまず講習員養成とし、次いで國語傳習所開設とした。「講習員養成は更に…教員養成と新領土官吏養成とした。而して國語傳習所は本島人に急速に國語理解者を養成し以て統治の理解者傳達者たらしめんとしたのである。他方で、永久事業として國語學校及師範學校を設け、國語學校をして内地人にして教員たるべき者及新領土に活躍すべき者を養成せしめ、師範學校をして本島人にして教員たるべき者を養成せしめんとしたのである」(教育史編纂会, 1939a)。住民を慰撫し、「忠良な臣民」へと教化するために、日本語と現地人教育、そして教師の養成が必須で急務だと認識していたのである。

表9は、各養成所・学校の募集要項である。教育事業の趣旨は4つあり、「第一は本島人に國語を授け、順良なる日本臣民たらしむべく之を教育すること、第二は内地人にして臺灣に於ける官衙の吏員となり、其他公私の業務に従事せんとする者をして土語を學ばしむること、第三は臺灣に於ける教育施設としては先づ普通教育の普及を圖ること従て之が教員たるべき者の養成に努むること、第四は本島人に對する教育と内地人に對する教育とは之を別箇のものとする事である」(教育史編纂会, 1939a)。植民地化を進めるには教育が決定的に重要な役割を果たすと考えていたことが露骨に表現されている。

こうして臺灣では、「初等普通教育初め國語學校の附屬學校及び國語傳習所に於て行はれ、其の後各地方に公學校が設けられることとなった。…男子高等普通教育は初め國語學校語學部國語學科に於て簡易なる程度に依り行はれ、後本島人の為にする中學校が設けられるに至った」。女子では、便宜的に「手藝科、後に技藝科」で行われた。本島人の教育は不十分として、「一つの整然たる系統制度を確立するの趣旨を以て作られたのが第七代の總督明石元次郎の手になった臺灣令であった」。「大正八年一月四日勅令第一號を以て臺灣教育令が制定せられた」(教育史編纂会, 1939b)。教育による文化支配の徹底である。

日本語を「母語」とするよう強制する臺灣令の「總則」と「普通教育」規定をみれば、戦争と教育は常に不可分であることが理解できる。中国では日中戦争の時期排日教育、抗日の教育が行われていた。日本統治後は、教科書も日本語教材となり、天照大神・神武天皇など、日本の神話も教えられた。旧満洲における教育では修身、歴史、地理、理科、体育、図画、算術等の教科書が、中国人向けに作られた。人物、背景や扱う地理は中国に関わらせるなど工夫が凝らされている。傀儡「満洲国」建国前と後では、現地人向けの教育内容・教科書は変化し、言語教育を通じた「同化教育」と「思想教育」の比重が増した(竹中, 2005)。教育は、戦争で教化の道具装置として利用されることを示すものだ。

ここで、学校教育、大学教育、師範教育、そして教科目の変遷に触れておこう。日本は、19世紀後半、西欧化を急速に進めた。学校教育を普及させたのもその一環だ。心理学に関わって言及するなら、人間の心身の発達に関わる科学、学問として積極的に教育に導入された。1868年の「學

表9 臺灣總督府設置の講習員・教員養成機関（1896年）

總督府 講習員	目的：國語傳習所師範學校等の教員と土人に直接する官衙の吏員とを訓節するに在り		
	甲種	五十名 目的：教員となるべき者の養成・学科：土語・國語教授法・土人教育方案・體操・唱歌等・修業年限大凡四箇月・卒業資格：國語傳習所、師範學校等の教諭助教諭訓導となる	
	乙種	二十五名 目的：吏員となるべき者の養成・学科：土語・支那尺牘公牘・體操等・修業年限約大凡四箇月・行政各部各官衙の吏員となる	
國語傳習所	所數 現在數 一四 來年設立數二 合せて十六所 目的：土人に現行國語を傳習し地方行政施設の準備を為し且教育の基礎を作ること		
	甲科生	學科：國語・讀書・作文・修業年限六箇年・卒業資格：街莊堡等に吏員となり又書房にて國語を傳するを得	
	乙科生	學科：國語・讀書・作文・習字・算術（地理・歴史・唱歌・體操）・修業年限は約四箇年・公私の業務に就き又は高等の學校に入るを得	
總督府 國語學校	甲 師範部 目的：將來國語傳習所、師範學校の教員及小學校の校長となるべきものを養成す・學科：修身、教育、國語、漢文、土語、地理、歴史、數學、簿記、理科、唱歌、體操・修業年限二箇年・卒業資格：國語傳習所、師範學校の教諭助教諭及小學校の校長等となる		
	乙 語學部	本國語學科 目的：土人の青年學生に國語を教へ兼ねて須要の教育を施し將來臺灣に於ける公私の業務に就かしめんとするに在り・學科：修身、讀書、國語、作文、習字、算術、簿記、理科、唱歌、體操・修業年限三箇年・卒業資格：通譯者、吏員、實業者等となり公私の業務に就く	
		土語學科 目的：内地の青年者に土語を教へ兼ねて須要の教育を施し將來臺灣に於ける公私の業務に就かしめんとするに在り・學科：修身、讀書、土語、作文、習字、算術、簿記、地理、歴史、唱歌、體操・修業年限三箇年・卒業資格：通譯者、吏員、實業者等となり公私の業務に従事す	
	丙 國語學校 附屬學校	目的：普通教育の模範、師範部生徒實地教授練習の用に供するに在り・學科：修身、國語、讀書、作文、習字、算術、唱歌、體操	
		幼年生	年齢：八歳以上十五歳以下・第一附屬學校・修業年限六箇年 其他二校四箇年・卒業資格：公私の業務に従事し又は高等の學校に入るを得
		青年生	年齢：十五歳以上二十五歳以下・修業年限二箇年・卒業資格：街莊の吏員、通譯者、學校吏員となり又は高等の學校に進入することを得
丁 國語學校 附屬小學校	目的：完全なる小學教育と實用的夜學校との模範を示すに在り・修業年限8箇月・卒業資格：公私の業務に就き又は高等の學校に進入するを得（夜學校に關する事項は逐て之を定む）		
總督府 師範學校	總督府師範學校 目的：普通教育に屬する諸學校の教員を養成するに在り・學科：修身、教育、國語、讀書、作文、算術、簿記、地理、歴史、理科、唱歌、體操・年齢十七歳以上二十五歳以下・修業年限三箇年・卒業資格：島内各地に設立する普通學校の教員となる		
	甲 師範學校 附屬小學校	目的：小學教育の模範を示し且師範學校生徒の實地練習の用に供するに在り・學科：修身、國語、讀書、作文、習字、算術、唱歌、體操、裁縫（女兒）・年齢八歳以上十五歳以下・修業年限六箇年・卒業資格：公私の業務に就き又は高等の學校に進入するを得	

教育史編纂会（1939）より

制」では大学と専門学校は明確には区別されていなかった（教育史編纂会，1938a）。1877年（明治10年）四月二十一日、文部省第二號布達「文部省管轄東京開成學校東京醫學校ヲ合併シ自今東京大學ト改稱候條此旨相達候事」（開成学校）、「東京大學ニ四學部ヲ置舊東京開成學校ニハ理學部法學部文學部ヲ置舊東京醫學校ニハ醫學部ヲ置候事」（東京大學）が出され、初めて官立の大學が設置された。

興味深いのは、学生が受講する学科課程である。法學部では1年生は心理学（大意）が必修科目に指定されていた（他は英吉利語・論理学・歐米史學・和文學・漢文學・法蘭西語）。理學部と文學部も同様で1年生で論理学・心理学（大意）が課された。師範學校では、1881年（明治十四年）師範學校教則大綱定められ、「第五條 高等師範學科ハ…心理、…トス」と規定された（教育史編纂会，1938b）。教育は、個人の固有の能力、精神的、智能の発達を國家社会との調和の中で促すものとされた。子どもの心身の発達に応じた教育の重要性が指摘され、日本人の優秀性を反映する指標として智能テストや知的の発達が関心を呼んだ。教育の科学化、効果的教育方法の開発、教授学習過程の解明など、学校教育への心理学の応用が施行され始めていた時期だ。田中寛一や植崎淺太郎など多くの心理学研究者が、旧満洲や臺灣など東アジアに現地調査、講習会に行っている。有効性、実効性がどの程度であったかは不明だが、教育科学の一端を心理学が担う方向にあったことは確かであろう。朝鮮半島の京城帝国大學で日本心理學會が開催されたのもその反映であったであろう。

表10 大正八年一月四日：臺灣教育令「總則」・「普通教育」

總 則	
第一條	臺灣ニ於ケル臺灣人ノ教育ハ本令ニ依ル
第二條	教育ハ教育ニ關スル勅語の趣旨ニ基キ忠良ナル國民ヲ育成スルヲ以テ本義トス
第三條	教育ハ時勢及民度ニ適合セシムルコトヲ期スベシ
第四條	教育ハ之ヲ分チテ普通教育、實業教育、専門教育及師範教育トス
普通教育	
第五條	普通教育ハ身體ノ發達ニ留意シテ德育ヲ施シ普通ノ知識技能ヲ授ケ國民タルノ性格ヲ涵養シ國語ヲ普及スルコトヲ目的トス
第六條	普通ママ育ヲ為ス學校ヲ分チテ公學校、高等普通學校及女子高等普通學校トス
第七條	公學校ハ兒童ニ普通教育ヲ施シ生活ニ必須ナル知識技能ヲ授クル所トス
第八條	公學校ノ修業年限ハ六年トス但シ土地ノ狀況ニ依リ之ヲ短縮スルコトヲ得
第九條	公學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齢七年以上ノ者トス
第十條	高等普通學校ハ男子ニ高等普通教育ヲ施シ生活ニ有用ナル知識技能ヲ授クル所トス
第十一條	高等普通學校ノ修業年限ハ四年トス
第十二條	高等普通學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限六年ノ公學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トス
第十三條	女子高等普通學校ハ女子ニ高等普通教育ヲ施シ婦德ヲ養成シ生活ニ有用ナル知識技能ヲ授クル所トス
第十四條	女子高等普通學校ノ修業年限ハ三年トス
第十五條	女子高等普通學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ修業年限六年ノ公學校ヲ卒業シタル者又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スル者トス
第十六條	女子高等普通學校ニハ實科ヲ置キ又ハ實科ノミヲ置クコトヲ得 實科ノ修業年限ハ三年以内トシ其ノ入学資格ニ關シテハ臺灣總督之ヲ定ム

教育史編纂会（1939）より

いずれにしても、教育によって、戦争が鼓舞され支えられ、民衆は抑圧され、圧殺される。教育は、戦争を支える「武器」になることを歴史記念館・資料館は教えている、このことを忘れてはならない。さらに重要なことは、専制支配に対する抵抗、レジスタンスを生む力もまた教育にあることだ。二二八記念館、革命烈士陵園、Caen 記念館、Oradour 記念センターは、子どもたちへの教育的効果を重視している。戦争を防ぐために、具体的に過去に学び 現在の平和実現につながる足場になることを期待している。Shoah 記念館には、子どもたちが見学し、大虐殺について学ぶA5サイズの解説付き小冊子（写真入り30ページのワークブック）が売られていた。平和学習教材だという。高校生用の専門的内容が含まれる、レベルの高い教材もあり、日本の学生用にと勧められた。日本でも戦争の記憶を平和につなげる資料館はある。子ども大人も多くが訪れる「ちひろ美術館」もその一つだ。「ちひろ」も「満洲」に渡った一人だった。安曇野には、開拓の石碑が建ち、旧満蒙開拓団が帰郷し開拓した村だ。今回、史跡・戦争記念館・史跡・資料館から学んだことは、「戦争は、私たちの身近にある」、「戦争は殺し合いである」、そして「戦争を回避し、平和を創り出す力は教育である」ということだ。

引用文献

(全体的考察・フランス)

アジア歴史資料館 (2014) 杉原千畝と「命のビザ」～東洋のシンドラーと呼ばれた外交官～杉原千畝とは
国立公文書館・アジア歴史資料館 (<http://www.jacar.go.jp/modernjapan/p14.html>)

AROMANCHES D-DAY MUSEUM (2014) Normandie - france

Edition de l'Association des Familles des Martyrs d'Oradour-sur-Glane (1994) ORADOUR SUR GLANE 10 June 1944

岡村志嘉子 (2004) 中国の愛国主義教育に関する諸規定 レファレンス, 64, 69-80.

加藤元宣 2011年12月号〈放送史への証言〉竹山昭子さん(放送史研究家)戦前・戦中・戦後を通して
みた体験的放送史 前編:『兵に告ぐ』から『玉音放送』へ「NHK放送文化研究所」放送研究と調査(月報)2011年12月号 pp.38-49. (http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/research/report/2011_12/20111204.pdf)

Krivopisco & Porin (2000) les fusillés de la Cascade du bois de Boulogne. MAIRIE DE PARIS.

Gullimar/Le Mémorial de Caen (2010) Guerre mondiale-Guerre totale (Translated from the French by Christopher Caines, (2011) 「World War: Total War」, The new Press, New York)

教育史編纂会 (1938a) 明治以降 教育制度発達史 第一巻 教育資料調査会

教育史編纂会 (1938b) 明治以降 教育制度発達史 第二巻 教育資料調査会

教育史編纂会 (1939a) 明治以降 教育制度発達史 第十一巻 教育資料調査会

教育史編纂会 (1939b) 明治以降 教育制度発達史 第十二巻 教育資料調査会

在日フランス大使館 (2004) フランス統計資料 (<http://www.ambafrance-jp.org/-/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%81%AE%E7%B5%B1%E8%A8%88%E8%B3%87%E6%96%99->)

在日フランス大使館 (2009) フランスの統計資料 2009年版 (<http://www.ambafrance-jp.org/>)

在日フランス大使館 (2012) フランスの統計資料 2009年版 (<http://www.ambafrance-jp.org/article5751>)

在日フランス大使館 (2014) フランスの基礎データ (<http://www.ambafrance-jp.org/%E3%83%95%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%81%AE%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E3%83%87%E3%83%BC%E3%82%BF>)

CNN (2014) 中国、旧日本軍人の供述書を公開—日本批判強める (2013年7月16日) (<http://www.cnn>).

co.jp/world/35050979.html)

CWGC (COMMONWEALTH WAR GRAVES COMMISSION) (2014) The Battle of Normandy, 1944

竹中憲一 (2005) 「満洲」植民地中国人用教科書集成 8 緑蔭書房

日本共産党 (2005) 戦争犯罪を忘れない-仏大統領、次代へ継承訴え- “歴史否定は真実への罪” しんぶん赤旗 (http://www.jcp.or.jp/akahata/aik4/2005-01-27/07_01.html)

Neveux, F. & Ruelle, C. (2007) NORTRE DAME CATHEDRAL BAYEUX OREP EDITIONS

MRN (MUSÉE DE LA RÉSISTANCE NATIONALE) (2014) 資料 (表題なし)

Fredj, J. (2011) The Jews of France during the Holocaust. Gallimard, Memorial de la Shoah

Památník Lidice (2014) HISTORY OF LIDICE VILLAGE (http://www.lidice-memorial.cz/history_en.aspx)

松岡智子 (2013) ユダヤ芸術歴史博物館とパリ・マレ地区 倉敷芸術科学大学紀要 (18), 15-26.

United States Holocaust Memorial Museum, Washington, DC (2014) Holocaust Encyclopedia Oradour-sur-Glane (<http://www.ushmm.org/wlc/en/article.php?ModuleId=10007840>)

※本研究は、平成25年度 (2013年度)・平成26年度 (2014年度) に学術振興会より科学研究費 (課題番号 25381012) の助成を受けて行ったものである。

(2015年3月26日提出)

(2015年6月8日受理)

The influence of the two world wars, the World War I and the World War II, on the research on Japanese educational psychology (Ⅲ).

Focusing on the relationship of Japan with other three countries, Taiwan, “Manshu-koku” (China) and France

BANZAI, Tomohide

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

The purpose of this study is to clarify the background of the times when psychological studies about school education increased during the World War I and World War II. I analyzed the social context of that times, referring to “Taiwan” which was a colony of Japan and the “Manchurian” of “MANSHUKOKU” in northeast China which was established by Japan. Total discussion was made referring to France which was the one of the allied powers which fought against Germany, Japan and Italy in the world war second. In the discussion I presented the three problems that the war brought us from viewpoints of the educational psychology. The first one is that “the war does not save people, and the forces repeat massacre and barbarity”. The second point is that the resistance movement, and the resistance for the occupying power save country. The third is, “the ruler forces the education of the ruler’s country on the colony people”. About the first problem, I pointed out the essential characteristics of violence that all of the war has, referring to the massacre occurred in Taiwan and the brutal conducts to the “Manchurian” in northeastern China by Japanese army. I also referred to the erasure of the Oradour villagers conducted by the Nazi SS in France. About the second point, I proved “anti-national traits” of the war. As an example, I showed the evidence that a lot of citizen and many of the democratic leaders were killed by Japanese army and by “Kuomintang of China” government immediately at the end of the world war, using the three kinds of materials displayed in the “228 Memorial” in Taiwan, the “Memorial Park of the Revolution Patriots” in State of China, Yanbian Korea group self-government Yanji City, and the French “Resistance Memorial”. On the third point, I made it clear that the government utilize educational system of their country to make influence on colonial inhabitants in the war time. As an example, I explained that Japanese government implanted Japanese educational system into Taiwan and China which were the colonies of Japan, and forced the colonial people to use only Japanese language. In every time and everywhere, great many of civilian lives were sacrificed during the war. The war does you and your enemy no good and much harm for both countries. This is the conclusion of the main subject.

Key Words: educational psychology, world war, education in colony, Shoah, resistance against Japan,